

# 鹿児島県指定有形文化財 「川邊コレクション」調査報告（2）

～黎明館開館30周年記念企画展～  
知られざる郷土玩具蒐集家の世界  
—県指定文化財「川邊コレクション」の人形たち—  
に関する調査資料から

学芸専門員 吉井秀一郎

Key Word：川邊正己, 昭和初期, 成田屋人形, 郷土玩具, うなゐの友, 『土偶』, 『土偶志』, 『犬張子』



写真1 知られざる郷土玩具蒐集家の世界—県指定文化財『川邊<sup>かわなべ</sup>コレクション』の人形たち—

## 1 企画展に至るまでの経過

鹿児島県歴史資料センター黎明館（以後：黎明館）は、鹿児島市で暮らしていた、川邊正己氏（1906～1997、以下：川邊）によって集められた玩具コレクション（関連文献も含む）を収蔵している。

この玩具コレクション（以下：「川邊コレクション」）が集められた時期は、満州事変から太平洋戦争、そして終戦の頃までの激動の時代であった。資料は鹿児島県内や全国各地の土人形、その他の郷土玩具、中国大陸の満州（現中国東北部）や華北地方、朝鮮半島、台湾、インドネシア、タイ、インドの人形や仮面等、東アジアの玩具が中心で、玩具だけでも4408点、文献、おもちゃ絵、版画などを加えると8743点にもなる、高い質と豊富な量を誇るコレクションといえる。

この「川邊コレクション」は、昭和29（1954）年に鹿児島県の重要文化財「玩具コレクション」に指定され、平成11年に黎明館に寄贈された。2014年は60年目の節目の年にあたる。

過去に、「川邊コレクション」の中から鹿児島県内の資料を中心に展示した企画展、「鹿児島の  
人形の民俗—県指定有形文化財川邊コレクションを中心に—」（平成16年度）が開催されているが、今回のような鹿児島県外の資料を中心とした本格的な企画展示は、初の試みであった。

昭和初期、川邊は郷土玩具蒐集という共通の趣味を持つ人々のグループに原稿を依頼されるなど、

手紙やハガキのやり取りをとおして全国の郷土玩具蒐集家たちとの交流を深めていた。そうして集められた各地の人形の中には、生産が途絶えてしまい、もう見るのが難しくなってしまったものも多く、この機会に全国各地の人形を展示することとした。

また、川邊が集めていた東北三県（岩手・宮城・福島）の人形たちは、鹿児島にあったことで東日本大震災による被災を免れることができた。そこで、被災地の早期復興を願い、その大切な人形たちも合わせて展示することとした。

## 2 章立て

企画展では、第1章から4章まで、次のように章立てを行なった。

### (1) 第1章 川邊コレクションの世界（資料一覧表参照）

川邊の蒐集した資料は、国内玩具、海外玩具、玩具関連文献、おもちゃ絵、中国民間版画、各種番付表、掛軸・色紙、絵葉書等多岐にわたっているので、観覧者が「川邊コレクション」全般を理解しやすいよう、「蒐集のはじめ」、「玩兄・玩友との交流」、「日本と海外の玩具」とテーマをしぼり、展示した。

#### ア 第一項 蒐集のはじめ

川邊は、昭和62年7月12日に、鹿児島県立加治木高等学校の図書委員会の取材を受けていた。その時語った内容が『この道ひとすじ 郷土玩具収集家』（発行：加治木高等学校図書委員会 1987）として、まとめられている。その中で郷土玩具に興味を持ったきっかけを次のように述べている。

（ア） 『うなみの友』を見て、郷土玩具は素晴らしいと思ったこと。

（イ） 『郷土玩具』（著：武井武雄）を読み、ますます関心を持ったこと。

（ウ） 昭和5（1930）年、大阪の弟からお土産に住吉大社の土人形をもらったこと。

そこで、「川邊コレクション」から文献資料の『うなみの友』と『日本郷土玩具（西の部、東の部）』、住吉人形の「陸蛇」、「陸犬」、「種貸しさん」、「裸雛」を展示することとした。



写真2 住吉人形「陸蛇、陸犬、種貸しさん、裸雛」(左から)



写真3 うなみの友 (右)

#### イ 第二項 玩兄・玩友との交流

昭和初期の郷土玩具蒐集家たちは、お互いを「玩兄」、「玩友」と手紙とハガキなどの書面で呼び合いながら情報を交換していた。川邊と「玩兄」・「玩友」との交流を知る資料として、川邊が編集

顧問の一人を務めた、釜山郷玩同好会の同好会誌であった『土偶』・『土偶志』等を展示した。

ウ 第三項 日本と海外の玩具（資料一覧表参照）



写真4 『土偶』・『土偶志』全巻と、日本と海外の玩具

北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州の郷土玩具の中から一部を展示した。その中でも東京の「犬張子」の臀部には、右の書き込みがある

贈 川邊正巳氏  
昭和十年六月八日  
於 神田「万惣」  
土俗玩具研究會

があるので、川邊と土俗玩具研究會（東京）との交流を物語る資料であることがわかる。『犬張子 第十三号』（1935）に、田中野狐禪による「川邊正巳君を迎えて（原文引用）」の一文が、書き記されているので以下に記す。「鹿児島に於ける郷土玩具研究家としての第一人者川邊正巳君が来東を幸ひ其歓迎会を万惣の階上で催ふした。川邊君は・・・（中略）・・・穩和なところ流石趣味家だなと敬服させられた、（原文引用）」（写真5）、この一文に記されたように、この「万惣」で催された歓迎の宴で贈られた「犬張子」（写真6）を展示することとした。宴の出席者の写真と氏名が掲載されており、堤龍生、祖父江悟楼、川邊正巳、田中野狐禪、倉本彦五郎、吉田一紅、越前久作が出席していたことがわかる。



写真5 『犬張子 第十三号』（1935）「川邊正巳君を迎えて（原文引用）」



写真6 犬張子

## (2) 第二章 鹿児島県の土人形の世界（資料一覧表参照）

鹿児島県の土人形資料として、東郷人形「立女」、帖佐人形「角力」、宮之城人形「三番叟」、向花人形「天川儀兵衛」、垂水人形「角力取」、垂水人形「俵持」、垂水人形「亀抱」を展示した。

帖佐人形、宮之城人形、垂水人形は復興されているが、顔料の違いから昭和初期のものとは趣が異なっている。特に垂水人形は、昭和初期に一度作られなくなったとされているが、昭和初期に制作者を訪ねた川邊によると、垂水人形は、大隅半島の高隈山の麓、垂水市街地から山峡へと進んだ所で、農作業の合間に少数の製作者により作られていたらしい。また、昭和初期までに製作された個体の顔料は剥離しやすいことが今回展示した資料の表面の状態からも見てとれる。

写真13で示した資料は、川邊が最初に『土偶』へ寄稿した、『土偶第三期一號』（1937）の「垂水の土偶」の解説文に添えた写真である。モノクロ写真ゆえに色彩の確認は難しいが、今回展示した資料垂水土人形「亀抱」と同一個体であろう。



写真7 東郷人形「立女」



写真8 帖佐人形「角力」



写真9 宮之城人形「三番叟」



写真10 向花人形「天川儀兵衛」



写真11 垂水人形「角力取」



写真12 垂水人形「俵持」



写真13 垂水人形「亀抱」



写真14 「垂水の土偶」

## (3) 第三章 テーマ別展示（資料一覧表参照）

### ア 第一項 歌舞伎の世界 成田屋人形「暫・矢の根・助六」

成田屋人形は、天保13（1842）年から幕府により江戸を追われていた七代目市川團十郎（当時は五代目市川海老蔵）が、嘉永2（1849）年に、赦されて江戸へ帰る際に、伏見稻荷大社の参道前の割松屋で、自分の舞台姿「助六」・「矢ノ根」・「暫」を人形として作らせ、百組（三百個）の人形を江戸の御晶辰への土産にしたのが始まりであるといわれている。「川邊コレクション」中の資料は、「助六」の傘と、「矢の根」の柄が欠損しているのだが、3体揃って集められている。3体の資料を比較すると、興味深いことに、「暫」のみが瞳の描き入れが無いことがわかる。描き入れてある個体とそうでないものと二種類の「暫」が存在していたのか否かは不明であるが、この個体以外に

は未だ確認できていない。

團十郎が割松屋に人形を作らせて以来、成田屋人形は割松屋を代表する人形となったが、現在は廃業している。成田屋人形は伏見人形の中でも人気商品の一つとなったので、他の伏見人形店でも真似て作られた。

今回展示した3体の資料では、「暫」人形の左袖、「矢の根」人形の腰部、「助六」人形の裾、ともに背側に「割松屋」とヘラを用いて書き込まれていることがわかる。しるあと歴史館春季特別展「伏見人形とその系譜～奥村寛純コレクション展～」図録（2007）に菱屋製の成田屋人形（99～100）が掲載されている。両人形屋製のものを比較すると、隈取や衣の色彩等の差違が確認できる。

また、新たな取り組みとして、京都新聞夕刊（2004.11.19）に、「成田屋人形150年ぶりきりり」の見出しで、團十郎、海老蔵父子の顔見せ競演を祝して京都で復刻版が作られたとの記事が掲載されていた。



写真15 伏見成田屋人形「暫」



写真16 伏見成田屋人形「矢の根」



写真17 伏見成田屋人形「助六」

## イ 第二項 華麗なる花魁人形

「川邊コレクション」の中から「花魁」の名の付く人形、10体を展示した。産地は、弘前下川原

(青森県)・八橋(秋田県)・中山(秋田県)・今戸(東京都)・佐渡(新潟県)・弓野(佐賀県)・垂水(鹿児島県)である。

弘前下川原、八橋、中山人形の東北地方の花魁3体を比べてみると、背面の着色は弘前下川原のみにあるなど異なる点が多いが、3体とも高さが12cm程であること、背の反り、衣装など類似点も見えてとれる。

弘前下川原人形は、青森県弘前市の郊外で作られている土人形で、かつての地名から下川原人形と呼ばれている。幕末の頃に製作が始まり、明治期には数件が製作していたが、現在は高谷家でのみ作られている。高谷家によると「昭和初期の人形の紫色は、年月とともに紺色に変色する」とのこと、土人形の着物部分に塗られた紫色の染料が変色して現在の紺色になったと考えられる。



写真18 弘前下川原人形「花魁」

八橋(やばせ)人形は、秋田県秋田市八橋で作られている人形で、地名から八橋人形と呼ばれている。元来、鈍色の彩色であったが、次第に明るい色に変わったという。江戸時代後期頃から明治時代中頃までに作られた人形を「古八橋人形」、それ以後から現在までの間に作られたものを「八橋人形」と区別することもあるが、展示資料は明るい色調の着色であるので明治後期から昭和初期に制作されたものであろう。



写真19 八橋(やばせ)人形「花魁」

中山人形は、秋田県横手市で作られている人形で、最初の製作地が横手市平賀町吉田字中山であったので中山人形と呼ばれている。材料の土の違いからか、八橋の粗い表面に対して中山人形のそれは、なめらかで洗練されている。二つの「花魁」人形の四方からの写真を比較してみると、髪型や着物や立ち方など、共通する点が見てとれる。



写真20 中山人形「花魁」

今戸人形花魁は、大正末から昭和初期にかけて製作されたものであると思われる。当時の製作者は「金澤姓を名乗る尾張屋春吉老人が父祖七代の功績を傳へてゐる唯一の国寶的存在である」(犬張子第十七号：1935年)と田中野狐禪が今戸人形について記しているように、尾張屋春吉が製作したものの一つであろう。この「花魁」は関東大震災後に復興した型の中の一つで、東京都江戸東京博物館調査報告書第4集館蔵資料報告1「今土焼」に掲載されている資料No.94004300と同一の型から作られたものであろう。



写真21 今戸人形「花魁」

佐渡夷人形「花魁」と銘打ってある人形2体を展示した。



写真22 佐渡夷人形「花魁」 1



写真23 佐渡夷人形「花魁」 2

武雄市弓野の土人形は博多人形を習得した作者が始めたもので、博多人形の流れを汲んでいる。胡粉を重ね塗りして磨き出す技法により顔に光沢をだし、底には和紙を貼り付けていた跡と指圧による粘土の貼り付けの様子が見て取れる。「川邊コレクション」中の「花魁」の名の付く弓野人形を3体展示した。



写真24 弓野人形「花魁」1



写真25 弓野人形「花魁」2



写真26 弓野人形「花魁」3



写真27 弓野人形「花魁」1の底部

写真28 弓野人形「花魁」2の底部

写真29 弓野人形「花魁」3の底部



垂水人形は、同じ鹿児島県内の帖佐人形、宮之城人形、東郷人形とは異なり、表面の色彩は触れると落ちるほどもろく、四・五種類の薄い絵の具を大胆、かつ効果的に用いた点に特徴がある。今回展示した「花魁」も同様に表面の色彩の剥離が進んでいる。



写真30 垂水人形「花魁」

### ウ 第三項 猿の軍団？「住吉大社の千匹猿」

千匹猿は、大阪の住吉で製作された土人形で、住吉大社の門前で、お土産として売られていた。縁起ものである。もとは一匹の厄除け猿が、安座をくみ御幣をもってお払いをしている様子を模したものが始まりといわれ、後に組み上げられたと伝え聞く。

昭和初期に製作されたもので現存するものはとても少なく、「川邊コレクション」の千匹猿はその中の一つである。



写真31 住吉大社「千匹猿」1



写真32 住吉大社「千匹猿」2

### エ 第四項 甘えん坊の金太郎！？

金太郎にまつわる伝説では、足柄山の山姥に育てられたと言われている。成長して坂田金（公）時と名乗り、源頼光につかえ、四天王の一人と数えられるまで活躍。主君頼光とともに大江山に住む酒吞童子（鬼）を退治したという話が知られている。しかし、現代人の大多数は、「まさか」か

ついで金太郎・・」ではじまる、明治33(1900)年に『幼年唱歌』に掲載された『金太郎』(作詞：石原和三郎，作曲：田村虎蔵)の印象が強く、山姥に育てられたという乳呑み児の頃の金太郎については知る人は少ない。

金太郎伝説の始まりの姿をかたどった山姥人形を展示した。



写真33 弓野人形「金時山姥」



写真34 東郷人形「山姥」



写真35 帖佐人形「金時山姥」



写真36 向花人形「山姥」

才 第五項 港町の異人さん「横浜開港人形」「長崎古賀人形」

横浜開港人形は、幕末から明治初期にかけての横浜の開港当時の人々の様子を模した土人形で、昭和2年から売り出された。「川邊コレクション」には次の2体が集められている。

横浜開港人形「黒人踊り」は、黒船来港の時にペリーが黒船に日本代表を招待した際、船員の白人たちが黒人のふりをして踊った様子を模したもので、初期の型にのみ存在するといわれている。「川邊コレクション」以外では南部祐生出会いの館（鳥取県）に、2体2種類が収蔵されているとのことである。



写真37 横浜開港人形「黒人踊り」



写真38 横浜開港人形「赤服」

古賀人形は、伏見、堤とならぶ古い伝統があるもので、長崎市古賀で焼かれている。江戸時代の鎖国期に唯一開港されていた長崎に近いため、異国風の物が多く製作されていた。



写真39 古賀人形「阿蘭陀さん」



写真40 古賀人形「あちゃんさん」

## カ 第六項 オッココンボの今昔

オッココンボとは、起き上がり小法師のことで、旧二月に鹿児島市の照国神社前の初市で売られていた。小振りで高さは4～5cmほどである。姫ダルマの一種で、真っ赤に塗られた体と白地に描かれた愛嬌のある顔に特徴がある。また、鹿児島方言で「デコッサアンオッカタ」（大黒様の奥方）とも呼び、今でもそれを買って、自宅の神棚の大黒様の隣に供えている。

今回は、昭和初期のもの（写真41・右）に、現在市販されているもの（写真41・左）を合わせて展示した。

現在、生産している会社は1社だけで、その会社の代表者によると、「型に紙粘土を貼り付ける土人形の製法に類似する方法で制作しているので、昭和初期のものとは製作方法が異なり、昭和初期のそれと比べて、出来上がりの大きさに大小のむらは生じにくい」とのことであった。



写真41 オッココンボの今昔

また、表情は、「現代のニーズに合わせて目をくっきり描いている」とのことである。代表者によると、それにより「かわいい」との評価を受け、好評であるとのことであった。

## キ 第七項 異色の存在チョコロ人形

顔を極端に大きく、胴や足は極端に短く作られているなど伏見人形の中では「異色」ともいえる存在のチョコロ人形は、「川邊コレクション」に、3体集められている

モデルとなったチョコロケン（チョコロ）は、江戸時代の京阪地方で数人一組となって家々をまわり歩いた正月の門付（かどつけ）芸人である。大きい張抜き籠に目鼻を描いたものをかぶり、黒塗りの大笠を戴き、割竹を持った者が先頭となって、太鼓やチャップパなどで調子を取り、「チョコロが参りました」などと唱えて町々を練り歩き、ご祝儀を貰ったそうである。3体とも背面は頭部のみの描きで、他は白色のままである。



写真42 伏見人形「徳吸チョコロ」



写真43 伏見人形「猿チヨロ」



写真44 伏見人形「お福チヨロ」

ク 今年の干支「お馬だヨ！全員集合」

今年の干支にちなんで馬をかたどった資料を展示した。



写真45 桑名人形「馬乗り鎮台」

写真46 今宿人形「池燈籠 兵隊」1

写真47 今宿人形「池燈籠 兵隊」2

写真48 今宿人形「池燈籠 兵隊」3



写真49 乙川人形「馬」

写真50 日向土駒

写真51 弓野人形「馬乗子供」

写真52 伏見人形「金札」



写真53 青森人形「馬」



写真54 堤人形「馬」



写真55 大名行列「馬乗武者」

#### (4) 第四章 東北三県の人形とともに（資料一覧表参照）

日本の代表的な土人形の一つとされている堤人形は、城下町仙台の北端、堤町で製作された。始まりは元禄時代にまでさかのぼり、4代藩主伊達綱村が江戸の陶工を招いて、藩内の杉山台に窯を築かせたのが始まりといわれている。その特徴は、浮世絵の世界を土で立体化して表現しているところである。仙台市博物館特別展図録「みちのくの人形たち－三春・堤・花巻・相良－」に1体「政岡」が掲載されており、形が類似しており、高さが17.6cmと「川邊コレクション」の「政岡」の85%の大きさである所が興味深い。また、堤人形「手桶持」（古型）と堤人形「手桶持」（古型）を用いて古型と新型とを比較できるように展示したが、この質感と色合いの違いは、土の違いと言うよりも玩具の持つ色彩の変化にあると思われる。その要因は、明治33年4月に「有害性著色料取締規則」の成立により、鉱物性絵具染料も有毒性が指摘され取締対象となったため、それまで使用されていたものが使用困難になったことにある。

また、福島県の会津張子の「赤ペーコ」であるが、現在お土産品として多くの「赤ペーコ」が売られているが、昭和初期のものは、現在のものと比べると、胴体が丸く尻下がりで、頭部も小さめである。



写真56 花巻人形「犬」



写真57 南部千両牛



写真58 花巻人形「天神」



写真59 会津若松練「天神」



写真60 堤人形「手桶」持古型



写真61 堤人形「手桶持」新型



写真62 三春張子「玉兎」



写真63 久之浜張子「象乗童子」



写真64 会津張子「赤ペーコ」



写真65 堤人形「馬乗外国兵」



写真66 堤人形「政岡」



写真67 東北三県の人形とともに

### 3 おわりに

今回、「～黎明館開館三十周年記念企画展～知られざる郷土玩具蒐集家の世界一県指定文化財『川邊コレクション』の人形たち」を開催するにあたり、8000点を超える資料の中から、約100点に絞り込みを行い、展示したわけであるが、開催するにあたり行った資料調査の成果を上げておく。

1点目は、玩友・玩兄との交流を示す資料「犬張子」(張子)に記された由緒書きと『犬張子』(同人誌)に書かれていた内容の一致。

2点目は、当時のもので、現存する数が少ないと思われる資料の確認。

『うなゐの友』(全十編),『土偶』・『土偶志』(全巻), 瞳が描かれていない「暫」, 「千匹猿」や横浜開港人形「黒人踊り」など、他の館で収蔵してある資料が少ない(もしくは無い)ものが、コレクションに含まれているということなどである。

今後、資料調査を継続していくことで、ますます成果の増加につながると思われるので、次の調査成果を公開できる場で展示していきたい。

まだ、企画展が始まり2週間だが、800名を超える観覧者に恵まれている。これらの資料を展示することで、資料に関するさまざまな情報が得られることを期待している。

(よしい しゅういちろう 本館学芸専門員)

## 資料一覧

写真番号	資料名	県名	写真番号	資料名	県名
1	企画展示室入口付近		27	弓野人形「花魁」1の底部	佐賀県
2	住吉人形	大阪府	28	弓野人形「花魁」2の底部	佐賀県
	「膝蛇」(高5.5cm)「睦犬」(高4.4cm)		29	弓野人形「花魁」3の底部	佐賀県
	「種貸しさん」(高4.5cm)		30	垂水人形「花魁」(高34.0cm)	鹿児島県
	「裸雛」(男雛高6.3cm, 女雛高5.2cm)		31	住吉大社「千匹猿」1(高21.0cm)	大阪府
3	『うないの友』・おもちゃ絵・ハガキ		32	住吉大社「千匹猿」2(高13.2cm)	大阪府
4	『土偶』・『土偶志』全巻		33	弓野人形「金時山姥」(高30.0cm)	佐賀県
	高知姉様(縦23.4～24.0cm)	高知県	34	東郷人形「山姥」(高20.8cm)	鹿児島県
	高松嫁入人形 鯛抱童(高9.4cm)	香川県	35	帖佐人形「金時山姥」(高25.2cm)	鹿児島県
	伏見人形 春駒持福助(高9.0cm)	京都府	36	向花人形「山姥」(高22.8cm)	鹿児島県
	アイヌ木彫黒熊(高5.3cm)	北海道	37	横浜開港人形「黒人踊り」(高12.9cm)	神奈川県
	古型博多人形 這い子(高5.9cm)	福岡県	38	横浜開港人形「赤服」(高12.5cm)	神奈川県
	山口人形 熊と角力(高8.5cm)	新潟県	39	古賀人形「阿蘭陀さん」(高23.5cm)	長崎県
	盛岡獅子車(高5.8cm)	岩手県	40	古賀人形「あちやさん」(高17.6cm)	長崎県
	木目込人形 七夕(高11.5cm)	東京都	41	オッノコンボの今昔	鹿児島県
	琉球猿乗馬(高11.9cm)	沖縄県	42	伏見人形「徳吸チョコロ」(高16.6cm)	京都府
	京城兀然童(高6.2～8.0cm)	朝鮮	43	伏見人形「猿チョコロ」(高11.8cm)	京都府
	搬不倒 連生貴子(高28.9cm)	中国	44	伏見人形「お福チョコロ」(高13.1cm)	京都府
	印度人形(高7.0～8.5cm)	インド	45	桑名人形「馬乗り鎮台」(高10.4cm)	三重県
	5	『犬張子 第十三号』(1935)		46	今宿人形「池燈籠 兵隊」1(高9.8cm)
6	犬張子(高24.5cm)	東京都	47	今宿人形「池燈籠 兵隊」2(高10.6cm)	福岡県
7	東郷人形「立女」(高38.0cm)	鹿児島県	48	今宿人形「池燈籠 兵隊」3(高9.8cm)	福岡県
8	帖佐人形「角力」(高46.0cm)	鹿児島県	49	乙川人形「馬」(高12.0cm)	愛知県
9	宮之城人形「三番叟」(高26.1cm)	鹿児島県	50	日向土駒(高10.0cm)	宮崎県
10	向花人形「天川儀兵衛」(高23.8cm)	鹿児島県	51	弓野人形「馬乗子供」(高22.1cm)	佐賀県
11	垂水人形「角力取」(高28.2cm)	鹿児島県	52	伏見人形「金札」(高12.2cm)	京都府
12	垂水人形「俵持」(高17.4cm)	鹿児島県	53	青森人形「馬」(高12.2cm)	青森県
13	垂水人形「亀抱」(高19.0cm)	鹿児島県	54	堤人形「馬」(高12.5cm)	宮城県
14	「垂水の土偶」		55	大名行列「馬乗武者」(高8.5cm)	東京都
15	伏見成田屋人形「暫」(高23.5cm)	京都府	56	花巻人形「犬」(高8.8cm)	岩手県
16	伏見成田屋人形「助六」(高22.5cm)	京都府	57	南部千両牛(高7.0cm)	岩手県
17	伏見成田屋人形「矢の根」(高18.2cm)	京都府	58	花巻人形「天神」(高17.1cm)	岩手県
18	弘前下川原人形「花魁」(高11.6cm)	青森県	59	会津若松練物「天神」(高11.8cm)	福島県
19	八橋人形「花魁」(高12.8cm)	秋田県	60	堤人形「手桶持」古型(高12.2cm)	宮城県
20	中山人形「花魁」(高11.1cm)	秋田県	61	堤人形「手桶持」新型(高12.2cm)	宮城県
21	今戸人形「花魁」(高8.3cm)	東京都	62	三春張子「玉兔」(高7.0cm)	福島県
22	佐渡夷人形「花魁」(高12.6cm)	新潟県	63	久之浜張子「象乗童子」(高20.2cm)	福島県
23	佐渡夷人形「花魁」(高19.9cm)	新潟県	64	会津張子「赤ペーコ」(高20.3cm)	福島県
24	弓野人形「花魁」1(高35.0cm)	佐賀県	65	堤人形「馬乗外国兵」(高18.0cm)	宮城県
25	弓野人形「花魁」2(高34.5cm)	佐賀県	66	堤人形「政岡」(高20.5cm)	宮城県
26	弓野人形「花魁」3(高31.4cm)	佐賀県	67	東北三県の人形とともに	

## 参考文献一覧

西暦	文献名	著者等
1930	日本郷土玩具 西の部	武井武雄
1935	犬張子 第十三号	祖父江梧樓
1937	土偶 第三期第一號	釜山郷土玩具同好會(清永完治)
1967	郷土玩具の縁起と伝説「日本郷土玩具百選」解説(太陽 平凡社)	牧野玩太郎
1982	全国郷土人形図鑑(光芸出版)	足立 孔
1985	我が国における着色料取締りの歴史:歴史的経緯からみた着色料の存在意義(北海道大学大学院環境科学研究科邦文紀要, 1:1-23)	光武 幸
1987	この道ひとすじ 郷土玩具収集家	鹿児島県立加治木高校図書委員会
1989	仙台市博物館図録 堤人形之美	仙台市立博物館
1992～93	全国郷土玩具ガイド1～4(婦女界出版社)	畑野榮三
1997	郷土玩具辞典(東京堂出版)	斎藤良輔
1997	江戸東京博物館調査報告書第4集館蔵資料報告1今土焼	江戸東京博物館
2007	伏見人形とその系譜～奥村寛純コレクション展～図録	高槻市立しろあと歴史館
1962	日本の郷土玩具(未來社)	斎藤良輔